

中山 紀子*

NAKAYAMA Noriko*



テセツテル(tesettür)とヒジャブ(hijab)についての覚書き

Notes on the tesettür and the hijab

はじめに

本稿の目的は、日本を含め、世界的に「ヒジャブ」という言葉がイスラーム的なスカーフを指す言葉として定着しつつあるなか、トルコでは「ヒジャブ」ではなく、同じくアラビア語ではあるが、「テセツテル」という別の言葉が使われていることに注目し、このことが何を意味しているのかを検討することである。関連する資料や文献を筆者が十分に渉猟していない状況であることは自覚しているが、まずは迅速に問題提起をし、識者の方々から多くの情報や助言をいただくことを期待している。いわば、学問のクラウドファンディングを目指していることをご了解いただきたい。

1 「ヒジャブ」がユニクロに出現

2016年6月、日本のファストファッションの代表格であるユニクロでヒジャブが販売され始めた。ヒジャブとは何を指しているのだろうか。ユニクロのホームページには、「体のラインが出にくい、ゆったりとしたジーンズ、レーヨンブラウス、ロングワンピースの他に、髪を覆うヒジャブなどをラインナップしています」とあり、「髪を覆うヒジャブ」、つまり頭部を覆うスカーフのようなものを指していることがわかる。これはムスリム（イスラーム教徒）の多

い東南アジアを中心に1年前から展開されているコレクションの一環である。コレクションのなかには、「カバヤ」(Kabaja、上衣)や「バジュクロン」(Baju Kurung、ブラウスとスカーフのセット)などマレー語がつかわれている商品もある¹⁾。新しいシリーズの2017 Spring/Summer Collectionではマレー語の商品名は消えたが、衣服はほぼそのままであり東南アジアとのつながりは消えていない。

このコレクションには「HANA TAJIMA (ハナ・タジマ)」という英国生まれのファッションデザイナーが関わっている。ハナ・タジマ氏は写真を見ると若い女性で髪の毛をシックなスカーフで覆っているが、人物紹介の欄に「自身の日本と英国からなるルーツに着想を得た機能的かつ現代的なデザインの数々は、さまざまな文化に呼応し、その活動は近年国際的な注目を集め続けている」と説明されているように、イスラームについての言及はない。ただし、商品であるヒジャブの説明に「ムスリムスタイルの小紋柄」や「ムスリムスタイルのデザインをきれいなカラーで表現」と並んで、「ムスリムファッションデザイナーとして知られる「HANA TAJIMA」とコラボレーションした人気シリーズ」とあり彼女がムスリムであることがわかるが²⁾、目立っているわけではない。ここで重要なのは、ユニクロという大衆的な場所に、東南

*中部大学国際関係学部

アジア経由で、お洒落なイメージを伴ってヒジャブという言葉が日本に入ってきたことである。

ヒジャブという言葉がすでに日本に浸透しつつあることは次の記事からもわかる。ネットの「ファッションニュース & ライフスタイル」(HP『FASHIONSNAPE.com News』) に「IMG がヒジャブ着用モデルと契約、カーリーヌやカニエも注目」というタイトルの記事が載った(2017年2月18日)。内容は「モデル事務所大手の IMG が、イスラム教徒でヒジャブを着用してモデル活動を行うハリマ・アデン (Halima Aden) と契約を結んだ。ハリマは、ケニアの難民キャンプで生まれ、幼少期にアメリカへ移住。昨年11月に行われたビューティーコンテストではミス・ミネソタに立候補し、タイトルを逃したものの、ヒジャブとブルキニを着用し参加した初めての出場者として注目を集めた」³⁾ であるが、内容はともかく、注目すべきは、記事のなかのヒジャブが一度も定義も説明もなく用いられていることである。ブルキニ (ムスリム女性向け水着。ムスリム女性の衣服とされているブルカとビキニを合わせた言葉) は説明のページに飛ぶようになっていることと対照的であり、ヒジャブという言葉の浸透具合がわかる。このようにヒジャブは、東南アジアだけではなく、最近では日本や英語圏でもムスリム女性のスカーフを指す言葉として使われ始めている。

ちなみに、日本語で「ヒジャブ」「ヒジャーブ」(アラビア語の原語の発音)「ヘジャブ」(ペルシア語の発音)「ターバン」をネットで調べると、それぞれ、86,900件、15,100件、64,200件、323,000件がヒットする。これらの数字は、ヒジャブ、ヒジャーブ、ヘジャブの場合、それぞれお互いが引用元となっていたりするので必ずしも実数を示しているわけではないが、おおまかな傾向は把握できる。最後のターバンの件数が桁違いに多いのは、男性も着用することや、ムスリム以外にインド人による着用がある

という理由もあるが、何よりもっとも以前から日本人に馴染んだムスリムの被り物を示す言葉であるからであろう。新しい表現である前者三者のなかでは、ヒジャブがもっとも件数が多い。意外にペルシア語発音のヘジャブの件数が多いが、原語であるヒジャーブはもっとも件数が少なく、現在ではヒジャブという東南アジア経由の言葉が定着しつつあることがわかる。

2 ヒジャブの意味の変遷

現在はムスリム女性のスカーフを指すことの多いヒジャブという言葉は、実は様々に変遷をしている。ヒジャブは前述したように、もともとアラビア語で、原語ではヒジャーブと長母音化する。今ではアラビア語でもそのような服装を指すのに使われているが、イスラームの聖典コーランに出てくる意味は少し違い、服を指すようになったのは最近のことである。ヒジャーブという言葉は、本来、預言者の妻たちと男性信徒をさえぎる、帳やカーテンの意味で使われていて(33章53節)、女性の服装にはヒマールやジルバールなど別の言葉が使われている。イスラームでは、女性は自分の美しいところを露わにして男性の心を乱さないように、髪の毛や体の線を見せないように命じられているとされ、こうしたイスラームの教えに適った衣服全般、あるいはそうした衣服を着用することをいつのまにかヒジャーブと呼ぶようになった。しかし、具体的な形態や着用方法の詳しい記述がなかったため、どのような衣服をヒジャーブと呼ぶのか、また衣服そのものを指すのか概念を指すのか、イスラーム圏でも地域によって認識が異なった。

日本ではヒジャーブという言葉や概念がどのように変遷してきたのか。研究者たちが書いたイスラームに関する代表的な辞典類、『新イスラーム事典』(平凡社 2002年。旧版は『イスラーム事典』(1982年)、『イスラーム世界事典』(明

石書店 2002年)『岩波イスラーム辞典』(岩波書店 2002年)のヒジャブに関する項目をみてみよう。『新イスラーム事典』(2002年 平凡社)では、「ヴェール」の項目で「ムスリム女性が髪や肌を覆うヴェールは、アラビア語でヒジャーブと呼ばれる。顔の中央から眼だけ残して足元までたらず長い布(ブルクー)、顔全体を覆う布(ニカーブ)や体全体を覆う黒い布(チャドル)など、さまざまな形がある」(岡真理)とある。同書には「チャドル」が別項目であり、「ペルシア語で、イスラーム教徒の女性の伝統的な服を指す。アラビア語ではハバラという。既婚の女性が着る、身体をすっぽり包む黒地の着物を意味する」(奴田原睦明)とある。ヒジャーブは巻末の索引に記載されているが「⇒ヴェール」となっていて個別の説明はない。同書の旧版である『イスラーム事典』(1982年)では、「ベール」の項目で「アラビア語ではブルクーがベールを意味する言葉としては一般的である。「覆い隔てる」という意味をもつヒジャーブも使われるが、これはアラブの女性解放運動の旗手カーシム・アミーンが唱えたスフル(ベールを外すこと)と対置される語でもある」(奴田原睦明)と説明されており、新版の2002年版のほうでヒジャーブの言葉がベールそのものを指すと明確である。衣服の項目はなく、索引に、「衣服 ⇒ガラビーヤ、ターバン、チャドル、ベール、帽子」となっている。なお、ガラビーヤの項目では「アラビア語ジルバブ(衣服)がなまったエジプト方言で、正しくはガッラービーヤ」(奴田原睦明)と説明があり、男性の長衣を指すことの多いガラビーヤと後述するインドネシアの女性が着用するジルバブが同根であることは、地域が変わると着用者の性別が変わる場合があることも示している。あるいはもともと中立的な名称が地域によって性別がつくとも言える。

『岩波イスラーム辞典』(2002年 岩波書店)

では、「衣装」(大塚和夫、大坪玲子)で全体像を描き、「ヴェール」(宮治美江子)「ヒジャーブ」(大川真由子)がそれぞれ別立てで項目があるうえに、「イスラーム服」(大川真由子)「(インドネシア)ジルバブ」(小林寧子)などの項目もあり、衣装に対する関心が増えてきたことと同時に衣装にまつわる事象が現実の世界でより動きがあったことを物語る。この辞典のなかでもヒジャーブはさまざまな使われ方をしている。「頭髪をしっかりと覆うヴェールの一種。(中略)ヒジャーブを着用するものはムハジヤバと呼ばれ、ジルバブという長袖のゆったりとした丈の長い上着と、ヒマールという髪や首をすっぽりと身につける」(項目「ヒジャーブ」)というように、ヒジャーブが具体的なヴェールであると同時に、ジルバブとヒマールという具体的な衣装を着用することをヒジャーブと呼ぶとしている。また、イランの説明で「革命後は逆に王政時代への批判も込めて、いわゆるイスラーム服と呼ばれる、地味な長衣に短いスカーフのヘジャーブ(ヒジャーブ)が強制された」(項目「ヴェール」)や、イエメンの説明で「顔を隠さず、バルトー(コート)にヒジャーブ(四角いスカーフを三角形に折って被り、あごの下で安全ピンで留める)を着用するスタイルもある」(項目「衣装」)とあるように各地域の具体的なベールを指している。

いっぽうで『イスラーム世界事典』(2002年)では、「アラビア語では“外出着”の総称はないが、ペルシア語ではヘジャーブ(アラビア語ではヒジャーブ。カーテン、スカーフの意味)と呼ばれる」(項目「衣服」大坪玲子、片倉もとこ)とあり、ここではヒジャーブが「外出着の総称」として使われている。ちなみにこの事典では「ベール」の項目はなく、索引にも「ヒジャーブを見よ」となっていて「ヒジャーブ」の項目しかない。同じく2002年出版でも、「ベール」の項目があつて「ヒジャーブ」の項目が

ない『新イスラム事典』や「ヴェール」「ヒジャーブ」両方の項目がある『岩波イスラーム辞典』など日本の辞典類もさまざまな対応をしている。「ヒジャブ」の項目が新たに立てられたり、ヒジャブ以外の項目内にヒジャブの言葉が散見されるなか、「ヴェール」「ベール」「衣服」「衣装」などの項目が長く使われていた/いることは、ヒジャブでくくり切れない現実を映しだしているようだ。

次にエジプトとインドネシアの個別の事例を検討したい。

『神のためにまとうヴェール——現代エジプトの女性とイスラーム』(2014年)という労作を著わした後藤絵美は、著書のなかで「ヒジャーブという言葉がいつからムスリム女性の衣服やヴェールに対して用いられるようになったのか、その歴史的経緯は明らかではない」(後藤 2014a:106)と述べている。たとえば、ヒジャーブの意味をめぐる議論がエジプトにおいて1899年に起こったが、その「当時のヒジャーブという言葉には、①ヒマールで胸を覆うこと、②ブルクウやニカーブと呼ばれるヴェールで顔を覆うこと、③女性を家に閉じ込めること、④女性が男性の中に混じるのを禁じることという四つの行為が含まれていた」(後藤 2014a:106-107)とあり、「ヒジャーブという言葉が論者によって多様な意味や背景をもって用いられてきたこと」(後藤2014a:114)がわかる。ヒジャーブが帳やカーテンの意味から離れて、ヴェールで身体を覆うこと、男女隔離などにまで広がっている。

エジプトでは、後年、ヒジャーブがイスラーム的な服装を意味するようになり、2000年代の前半には若い女性を中心に大流行するという現象もみられた。ヒジャーブはどのようなイメージを持たれているのであろうか。後藤は、当時ヒジャーブ着用を決意した二人の女性たちが、「自分が実際にヒジャーブをまとうとは考

えてもみなかった。むしろヒジャーブは「古い」「田舎くさい」「恰好悪い」と思っていたという」(後藤 2014a:12)ことを紹介している。また、2004年に出版された宗教冊子『ヒジャーブに関する対話』のなかに女性のヒジャーブの必要性や重要性を説いたものがある。登場人物は4人の女子大学生であるが、そのなかのイスラームの知識の豊富な女性が、イスラームの道に敵ったヒジャーブには次のような条件があるとし、「1、女性の身体を覆うこと、2、それ自体、飾りにならないこと、3、下が透けて見えない、分厚い布地でできていること、4、身体に密着せず、ゆったりしていること、5、香水やお香の匂いがついていないこと、6、男性の衣服と似ていないこと、7、不信仰者の衣服と似ていないこと、8、目印となるような(目立つ)衣服ではないこと」(後藤 2014a:150)を挙げている。かなり禁欲的な条件である。

このようにエジプトでは、「禁欲的」、あるいは「古い」「田舎くさい」「恰好悪い」と思われることもあるヒジャーブであるが⁴⁾、現代のインドネシアでは事情が異なる。野中葉の著書『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』(2015年)は、表紙にまさに赤、緑、黄緑、紫のカラフルなスカーフをまとった華やかな女性たちの写真が載っている。本を開けると、白黒ではあるが、クルドウン (kerudung)、ジルバブ (jilbab)、ヒジャーブ (hijab)⁵⁾とキャプションがついた写真があり、女性たちがそれぞれに特徴のあるヴェールを着ている。

「クルドウン」は1980年代より以前に女性たちが身に着けてきたヴェールで、柔らかい半透明の布で、頭から肩をルーズに羽織るだけの形状で、年配の女性か伝統派のムスリマが身に着け、首や髪の毛は完全に覆われないため、首や髪の毛の一部がしばしば見えてしまうようである(野中 2015:28)。いっぽう、1980年

代頃から都市部の若い女性たちの間で着用されるようになったヴェールは「イスラームの教えの遵守」が強く意識されていた。大きくて不透明の厚い正方形の布を三角に折り、頭と髪の毛と首と、胸までを完全に覆い、顎の下をピンで留めるのが一般的であった。後に、このヴェールは「ジルバブ」と呼ばれるようになっていった（野中 2015:29）。活動家である女子学生たちはイスラームの教えを遵守する自らのヴェール着用が、年配の女性たちの必ずしもイスラーム的な意味を持たないヴェール着用とは異なるという意識を明確に持っていた。彼女たちにとって、（クルドゥンという）既存の用語ではなく、クルアーン起源の用語を用いて「ジルバブ」と呼ぶことのほうが理に敵っていた（野中 2015:45）。その後、2000年代後半には、よりファッション性を重視し、布を二重、三重に巻くスタイルが一般的になっていった（野中 2015:143）。こうしたファッショナブルなスタイルを「ヒジャーブ」と呼ぶようになるが、それには2010年頃からはじまったヒジャーバズ・コミュニティというグループの活動が大きい。ファッションの世界で活躍する若い女性たちによるこのコミュニティは、自らの着用するヴェールをジルバブとは呼ばず、それまでインドネシアで馴染みのある単語ではなかったが、アラビア語でムスリマのヴェールを指す「ヒジャーブ」という言葉を採用した。イスラームに依拠しつつ、アラブと西洋、いずれの世界の雰囲気も醸し出すことのできる言葉が、女性たちによって作り出されたのであった（野中 2015:156）。

3 トルコではテセツテュル

こうして、ヒジャブにしろ、ヒジャーブにしろ、短母音と長母音の差異はありながら、多くの国でイスラーム的な被りものを指す言葉が一つの言葉に収斂していくかにみえるなか、ト

ルコにおいては別の言葉が使われている。それは、同じくアラビア語起源で、またヒジャブと同じ「帳」「覆い」などを表わすテセツテュル（tesettür）という言葉である。日本語のウィキペディアで「ヒジャブ」の項目⁶⁾を探し、そのページにある他言語に飛んでみると、インドネシア語、英語はもちろん、ほとんどの言語がヒジャブとなっている。ペルシア語で「ヘジャベ・イスラーミー」（イスラーム的なヒジャブ）となっているのが多少の差があるくらいだが、明らかに異なるのがトルコの tesettür という項目である。日本語のヒジャブのページからトルコ語を選ぶと tesettür につながるのである。トルコ語の tesettür のページには「hicab⁷⁾ は tesettür と同じ意味をもつ」という簡単な文章があるが、その hicab のページに行くと、「tesettür を見よ」と表示があり、hicab の説明はまったくなく、hicab が tesettür と一体化していることがわかる。カザフ語やアゼルバイジャン語など他のトルコ系の言語ではヒジャブとなっており、トルコ語の言語上の問題でもなさそうである。

ヒジャブという言葉が多く地域で通用しているなか、トルコだけが別の言葉である tesettür を使っていることには何か意味があるのではないだろうか。トルコの女性の服装を説明する日本人研究者のなかにはテセツテュルに言及している人もいるが、「トルコで、イスラーム的な女性の服装（テセツテュル）というのは、髪の毛と肩を完全に覆う頭巾（バシュオルテュ）と外套（パルデスュ）の組み合わせである」（竹下 2005:23）とか、「スカーフを被りコートを羽織るイスラーム・スタイルの服装（テセツテュル：tesettür）」（大曲 2007:237）とかトルコではこういう言い方をするというように紹介しているだけで、とくにこの言葉に注目して論じているわけではない。しかし、テセツテュルやテセツテュルの使い方には看過できない問題が含まれていると筆者には思える。テセツ

テュルという言葉を考察すると、どのような現代トルコの状況が顕在化するだろうか。

テセツテュルという言葉がトルコでいつごろから使われ始めたのかに関しては、実ははっきりしない。筆者は20数年前にトルコのイスタンブルや西黒海地方で現地調査を行っているが、そのときにこの言葉が頻繁に使われているのを記憶していない。Kitapyurdu (『本の国』)⁸⁾ というトルコ語の本の検索サイトで tesettür を引いてみると、35冊ヒットしたが、そのうちの大部分である28冊が2008年以降に出版されたものであり、2005年、1998年、1995年、1992年、1990年に1冊ずつ、出版年不明が3冊であった。最も古い1990年に出版された「İslam'da Kadın Tesettür İzdivaç」(『イスラームにおける女性、テセツテュル、結婚』) は内容説明のなかで、「テセツテュルの、すなわち、覆うことの」(“tesettürün yâni örtünmenin”) と、テセツテュルを「覆うこと」とわざわざ解説している。また、1992年に出版された「Tesettür ve Toplum」(『テセツテュルと社会』) は題名に tesettür が使われているだけで、本の内部ではほぼ、Başörtüsü (頭を覆った) という言葉が使われ、ある章では、目次には tesettür を使って書かれているのに本文には Başörtüsü が使われていた。本の題名に関しては1990年代にはこの言葉は定着していなかったようである。

テセツテュルは現在、女性の衣服について使われることが多いが、単にイスラーム的な衣服というより、華やかなファッションで身をつつむことを指している。これは1990年代に、それまでにはほぼ存在しなかった、「ファッションナブルでありながらモデストな衣服」(Liberman 2012:40) を扱う会社が現れたことが大きい。そうした会社の代表格である「テクビル衣料」(Tekbir Giyim) は、1982年に仕事を始め、1990年にこの名前で創業し、1992年にはトルコで、おそらく世界でも最初のテセツテュルの

ファッションショーを行った。イスタンブルの旧市街のバヤジット地区にあるプレジデントホテルにおいて、トルコでも有名なモデルたちを使って開催され、一躍注目を浴びることになった。社長のムスタファ・カラドゥマンは1980年代にテセツテュルにふさわしい服がなかったことに注目し創業した。のちに「テセツテュルで世界ブランド (Tesettürde dünya markası)」という言葉を経営のスローガンにしたカラドゥマンは、当時の状況について「そのころ、テセツテュルという言葉はあまり知られていなかった。まるでアラブの衣装かのように考えられていた」⁹⁾ と言っている。

1992年のファッションショーから2年後の1994年にカラドゥマンにインタビューした Yael Navaro-Yashin は、2002年に著した *Faces of the State: Secularism and Public Life in Turkey* のなかの第3章 The market for identities: buying and selling secularity and Islam において、商品としてのベールを論じた。カラドゥマンの言葉「これまで女性たちは、美しくないからベールを避けてきた。ベールをつけない(açık、次節で詳述)ほうが美しく見えるからそれを選んできた。しかし、我々は、ベールをつけることがより美しくファッションナブルに見えること、さらに重要な、よりモダンで上層階級に見えることが、イスラームの教えを守ることと同時に可能だと示してきた」(Navaro-Yashin 2002:97) を紹介し、また、美しいモデルたちの着る華やかでファッションナブルな衣装を「オスマン宮廷からのインスピレーション」と紹介し、ファッションショーに正統性と力を寄与している (Navaro-Yashin 2002:107) とした。消費社会の時代、ベールは信仰の現れというよりも、フェティッシュ、それ自体が重要となる。イスラーム主義者たちは世俗主義者たちを、西洋の物真似、偽物の西洋として描きがちであるが、消費行動からみると、近代的であろうとするイスラーム主義者

たちもまた、自らが批判する西洋や世俗主義者たちと生活様式はそう大差なくなっている (Navaro-Yashin 2002:111-112)。

企業側ではなく、消費者側、すなわち、実際にテセツェル・ファッションをしている女性たちの言動から、彼女たちがいかにテセツェルとスタイルの間を「交渉」しているかを Banu Gökarişel と Anna Secor が、Between Fashion and Tesettür: Marketing and Consuming Women's Islamic Dress (2010) で描いている。2009年夏にイスタンブールとコンヤにおいてイスラーム服の消費者である複数の女性たちにテセツェル販売会社のカタログ写真を見せて話しあってもらった。女性たちのテセツェルとスタイルに対する意見は「信仰を理由に被るならその決まりに従うべき」「宗教上の教え以外の配慮がある」など様々であるが、テセツェルと認めても「おばあさんのよう」で「着られない」と反応したり、ハイヒールを履いて鮮やかなコーラルレッドを基調にした服装に対して、派手な赤色はテセツェルにふさわしくないという意見が出たものの、着るかどうかと問われたら「着る」と答える女性もいた。ある女性は、信仰にまつわるものだったはずのテセツェルがもうおかしくなったと言ひ、自らの意志で頭を覆って、身体のラインを隠していた自分が、今ではファッションの流行の変化についていかなければと思う。「私はどんどん小さいサイズを買うようになって、今では身体にぴったりした服を着てしまっています。ファッションデザイナーのせいだ」。ファッションがテセツェルを変化させ、多様化させている。彼女たちは企業が押し出すイメージが、イスラーム的なテセツェルの理想とかけ離れていると感じるいっぽう、自分たちにとってスタイルやファッションが重要であることも認識している。このような緊張関係を意識しながらも彼女たちは簡単にテセツェル・ファッションを避

けてしまうのではなく、その間をうまくやり取りしながら生きている。つまり、ムスリム女性の服装を決める「つつましき」についてのイスラーム的な決まりごととは、熱心な信者にとっても超歴史的で脱文脈化された画一的なものではなく、実践においては他の美意識や個人的な欲望とからみあっている (Gökarişel & Secor 2010:143-145)。

4 「アチック・カパル論」との関連

筆者は1991-1993年のイスタンブールおよび西黒海地方の村での調査をもとに、トルコの女性のありかたについて、「アチック (açık、髪の毛を隠さない)」と「カパル (kapalı、髪の毛を隠す)」という形容詞に注目して論じたことがある (中山 1995, 1999)。本稿のテーマであるテセツェルと関連させて考察してみたい。

トルコの「近代化」は、イスラームを遠ざける「世俗化」に収斂され、その過程において女性のあり方や生き方がイスラームと「世俗化」を主張するそれぞれの立場を最も鮮明に映し出す象徴になっていった。本来は、「開いている」状態あるいは「閉じている」状態を意味するトルコ語の形容詞「アチック」あるいは「カパル」という言葉が、女性がスカーフなどで「髪の毛を隠さない」状態あるいは「髪の毛を隠す」状態を示すようになる。初めは、女性の外見だけを示していたこの二つの言葉は、しだいにイデオロギーの付加価値を付けて用いられるようになった。「アチック」と呼ばれる女性には、世俗主義を支持するケマリスト (アタテュルク主義者) と、ケマリストとは一線を画す西欧的なリベラリズムをより理解しているフェミニストがおり、「カパル」と呼ばれる女性には、世俗主義への異議申し立てをするイスラーム主義者がいる (中山 1999:211)。

農村女性は慣習的に全員スカーフを被っているため「カパル」に近いが、たんに「村の女性」

と呼ばれ、「カパル」と呼ばれることはない。農村女性は「カパル」という類型に完全に一致しているわけではなく、完全には取り込まれていない。スカーフ着用の有無で、一見、女性を二分しているかのように思われる「アチック」あるいは「カパル」という二つの類型は、トルコ共和国という世俗化したムスリム大国に出現した錯綜するイデオロギーの所産であり、そのような状況のものにおける「社会的な性」や「文化的な性」としての女性を示したものである (中山 1999:211-212)。実は、社会変化のなか、学校教育やドイツへの出稼ぎ労働などを契機として、村を発信地とする「アチック」化現象と「カパル」化現象が起こっている。形態的であってもイデオロギー的であっても、「アチック」あるいは「カパル」は固定してるかのように見えるが、実は農村の女性にとっては、どちらにも変われる二つの選択肢に過ぎない (中山 1999:216)。イスラームに内包されている女性性規範を強く維持しながら、イスラームそのものは緩やかに実践し、表象はいつでも変えられるゆらぎのなかに融通無碍に生きている農村女性こそ、イスラームと世俗主義という二分法的対立図式に依拠する「近代的」な発想を解体し、観念よりも生活実感に即した、しかも現実社会との対応のなかで揺らめく個々人の動態そのものを示す「現代化」の可能性をもつ存在である (中山 1999:217-218)。

このように、「アチック」「カパル」という女性のスカーフ着用を示す言葉が、形態だけではなく、政治的な立場を表明していることを明らかにし、また、そうした立場を超える農村女性の存在の重要性を指摘した。そのうえで筆者は結論を「スカーフの着用という表象にはこだわらなことを止めて、その内実を検証してこそ初めて、トルコ社会の現実の姿がみえてくるだろう」(中山 1999:223) という文章で終えている。これまで述べてきたテセツテュルは、むろん

「カパル」に近いが、「カパル」が政治的な意味合いが強いのに対し、テセツテュルは「髪の毛を隠す」「イスラーム的な教えに自覚的に沿う」というだけでなく、イスラームの商業化、商品化、さらにはファッション化の問題を抱合している。いわば、カパルの進化、深化、あるいは分散化がみられる。

Tesettür と hicab について知り合いのトルコ人に聞いてみたところ、彼らの答えにはテセツテュルとアチック・カパル論との関連性が表れていた。「tesettür とは髪の毛を隠し、長い外套を着たモダンなカパル (髪の毛を隠している) の女性。チャルシャフ (チャドル) に対して tesettür という言葉を使うのは聞いたことがない。hicab はトルコ語ではあまり使われないが、他の言語で、チャルシャフやブルカを着た女性たちに対して使われると知っている。ただ、イスタンブールではアラブ人旅行者向けの商売では tesettür の代わりに hijab と言われているのを聞いたことがある」(40代、女性、大学非常勤講師)。「tesettür とはアチック (髪の毛を隠していない) な女性がスカーフを被りたいときに選択するスタイル。あんなスタイルでは被らないほうがまだ。ヒジャブという言葉は今初めて聞いた」(20代、男性、学生)。

40代女性は、テセツテュルを「モダンなカパル」な女性が着用するものと理解し、イスラーム色が強く重々しいチャドルやブルカは、たとえ身体の線を隠すことというイスラームの教えを遵守するのにふさわしいとしても、テセツテュルとみなしていない。つまり、テセツテュルはお洒落でなくてはならない。20代男性の言葉は、さらに、テセツテュルがすでにイスラームの教えを守ることを超えていることを示唆している。普段はスカーフを被らない女性でも、お洒落のためならテセツテュルをする。これは本稿の第3節で紹介した、イスラームファッション業界の第一人者のムスタファ・

カラドウマンが「ベールをつけることがより美しくファッショナブルに見えること」を目指してきたことと重なっている。アチックな女性どころか、イスラームの教えに従い敬虔であろうとする女性たちですら、このファッション化には抗えていない。第3節で紹介した Gökarıksel たちがインタビューした女性は、自身は敬虔であるにも関わらず、「私はどんどん小さいサイズを買うようになって、今では身体にぴったりした服を着てしまっています。ファッションデザイナーのせいで」とまで言っている。もうテセツェル・ファッションの勢いはとまらない。これは、カパルの女性が、慣習として髪の毛を隠している村の女性たちと比べて、イスラームの教えるとして髪の毛一本も見せないように慎重に、意識的に、自覚的に、スカーフを被っているのと対照的である。テセツェルは意識的に、自覚的にどころか、自らをコントロールできないところまできているのではないか。

イスラームを高度に強調した「カプル」に比べ、商業化が進む「テセツェル」は、イスラーム的な敬虔さを装いながら、イスラームから遠ざかっているようにもみえる。装いはどこまでイスラームを物語っているのか。最近、スカーフの無意化の必要性を説く研究が出た。トルコの小売店で働く低所得者層の女性たちを対象とした調査で、Feyda Sayan-Cengiz は、就職のためにスカーフを外してもかまわないと考える多くの女性に会った。彼女たちはスカーフをつけているからといって宗教熱心でもアイデンティティにしているわけでもなく、目立たないようにと望んでいる。スカーフは外の実践であっても内の実践（宗教心が篤い）というわけではない。スカーフ問題に掛けられている過剰な荷を下ろすべきだと主張している（Sayan-Cengiz 2016:128）。彼女はまた、これまでの研究の対象が高学歴のエリート女性に偏っていたことを指摘し、対象から漏れ落ちている女性たちがい

ることを明らかにした。筆者の調査した農村の女性たちも、村では全員スカーフを被っているものの、教育や出稼ぎ労働などを契機として、スカーフを脱いだり、被りなおしたり、状況ごとに対応していた。農村女性と都会や町の小売店で働く低所得者層の女性たちは似ている。筆者が20年ほど前に指摘した「観念よりも生活実感に即した、しかも現実社会との対応のなかで揺らめく個々人」（中山1999:218）に注目する重要性はまだ有効と言えそうだ。

おわりに

ユニクロで販売され始めたヒジャブに象徴されるように、現在、ムスリム女性の被るスカーフがヒジャブという名称に世界的に統一されかかっているが、本稿で見えてきたように、実は名称も形状も意味合いも、歴史的、地域的にそれぞれ異なっている。もともとカーテンの意味をもつヒジャブという言葉は、それ自体が時代とともに意味合いが変化してきている。トルコではヒジャブを使わずテセツェルという言葉を使っている。同じヒジャブでも地域によって意味合いが異なり、また、それぞれの地域で変遷の状況も異なる。エジプトのヒジャーブはインドネシアのジルバブであろうし、インドネシアのヒジャブはトルコのテセツェルやエジプトのヒガーブ・アラ・モードにあたるだろう。インドネシアでお洒落な意味合いをもつヒジャブはトルコではあまり知られず、知られていてもお洒落とは程遠いものと思われている。

ヒジャブの商業化により、企業側、消費者側の思惑や欲望、消費者の多様性がからまり、事態はさらに複雑化している。「ヒジャブ」という一言では全容がわからないことを我々はまずは自覚すべきであろう。今後は、さらに範囲を広げて各地域での状況をそれぞれ調査するとともに、地域横断的に共同研究を進めることができれば、おそらくこれからも揺れ続けるであら

うテセッテュルとヒジャブの概念と内実を把握し、イスラーム圏の多様性や複層性の理解につながるのではないか。本稿がその一助となれば望外の喜びである。

謝辞

本稿の起草・作成にあたり、中部大学国際関係学部事務室の吉田雅子氏から貴重な情報を、また、同学部卒業生の小栗宏太氏からは、議論をするなかで多くの有益な助言をいただいた。ここに記して、お二人に感謝します。

【注】

- 1) 2016年6月14日のユニクロのプレスリリースのページより。タイトルは、「ユニクロからコンフォートウェアの新しい提案「HANA TAJIMA FOR UNIQLO」6月30日(木)日本初上陸」。http://www.uniqlo.com/jp/corp/pressrelease/2016/06/16061415_ht.html
- 2) HanaTajima 2017 Spring/Summer Collection のページより。http://www.uniqlo.com/jp/store/feature/uq/hanatajima/women/?utm_medium=email&utm_source=uq_html&utm_term=uh_160630w&utm_content=113
- 3) FASHIONSNAPE.com News、「IMG がヒジャブ着用モデルと契約、カリーヌやカニエも注目」より。http://www.fashionsnap.com/news/2017-02-18/halima-aden/
- 4) エジプトでもファッションナブルなヒジャブが2000年代に現れつつあり、それが「ヘガープ・アラ・モーダ」(流行のベール)と呼ばれていることを後藤(2014b)が別の記事で紹介している。
- 5) 野中が自身の著書のなかで、東南アジアで使われている「ヒジャブ」ではなく、アラビア語の原語に近い長母音化した「ヒジャープ」という表現をしているため、本稿でも野中からの引用は「ヒジャープ」を使う。
- 6) 「ヒジャブ」『ウイキペディア』(2017年3月19日参照)。https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%83%96
- 7) トルコでは hijab よりこの hicab の表記のほうが一般的である。
- 8) Kitapyurdu.com (HP『本の国』)、http://www.kitapyurdu.com/.
- 9) Şafak Altun と Cenk Sarıoğlu による以下の記事より。「İlk tesettür markası Tekbir Giyim nasıl kuruldu? Tekbir Giyim'in kurucuları kimdir? İlk tesettür defilesi ne zaman yapıldı?»(「最初のテセッテュル・ブランドの Tekbir Giyim はどのように創立されたか、創立者は誰か、最初のテセッテュル・ファッションショーはいつ行われたか」)(HP Uzmanlar.com.)。

http://www.uzmanlar.com/moda/moda-tarihi/ilk-tesettür-markasi-tekbir-giyim-nasil-kuruldu. (掲載日不明)。なお、Tekbir Giyim と創立者ムスタファ・カラドゥマンを扱ったドキュメンタリーがある。『変わるトルコのビジネス界 (Turkey's Tigers)』(DCTV/WNET、アメリカ 2006年)。

参考文献

- 後藤絵美 (2014a) 『神のためにまとうヴェール——現代エジプトの女性とイスラーム』中央公論新社。
- 後藤絵美 (2014b) 「ヴェールのファッション化と宗教言説の変容——「ヘガープ・アラ・モーダ」の誕生」『SYNODOS』(2014年08月19日 07:00)。α-Synodos vol.153+4号からの転載。
http://blogos.com/article/92724/?p=1
- Gökarkınel, Banu, Anna Secor, 2010, Between Fashion and Tesettür: Marketing and Consuming Women's Islamic Dress, *Journal of Middle East Women's Studies* (6/3: 118-148).
- Lieberman, Yoray, 2012, Tekbir and SetrMS: the Art of Covering up in Turkey, *Islamic Fashion*, Pepin, pp. 40-51.
- 中山紀子 (1995) 「アチック (açık, 開いた状態) とカパル (kapalı, 閉じた状態) ——トルコにおける世俗化、イスラーム、女性」『民族学研究』(59/4:453-463)。
- 中山紀子 (1999) 『イスラームの性と俗——トルコ農村女性の民族誌』アカデミア出版。
- Navaro-Yashin, Yael, 2002, *Faces of the State: Secularism and Public Life in Turkey*, Princeton University Press.
- 野中葉 (2015) 『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版。
- 大曲祐子 (2007) 「ムスリムの国トルコのスカーフ問題——世俗主義とイスラーム主義の相克」内藤正典、阪口正二郎編『神の法 vs. 人の法——スカーフ論争からみる西欧とイスラームの断層』、日本評論社、pp. 237-271。
- Sayan-Cengiz, Feyda, 2016, *Beyond Headscarf Culture in Turkey's Retail Sector*, Palgrave Macmillan US.
- 竹下政孝 (2005) 「中東情勢分析 文化紹介 トルコの世俗主義とヴェールの問題」『中東協力センターニュース』(30/4:23-27)。

辞典類

- 『イスラーム事典』(平凡社 1982年) 日本イスラーム協会、嶋田襄平、板垣雄三、佐藤次高監修。
- 『新イスラーム事典』(平凡社 2002年) 日本イスラーム協会、嶋田襄平、板垣雄三、佐藤次高監修。
- 『イスラーム世界事典』(明石書店 2002年) 片倉もとこ、加賀谷寛、後藤明、内藤正典、中村光男編。
- 『岩波イスラーム辞典』(岩波書店 2002年) 大塚和夫、小杉泰、小松久男、東長靖、羽田正、山内昌之編。